

## 電子ジャーナルとオープンアクセス Electric Journal and its "Open Access"

加藤 憲二<sup>1\*</sup>  
KATO Kenji<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 静岡大学理学研究科, 前附属図書館

<sup>1</sup> Faculty of Science, Shizuoka University

[ジャーナル価格の高騰] わが国の国立大学の3分の2以上ではA社が発行するジャーナルの全タイトルを読むことができる、いわゆるフリーダムタイプの購入をしています。学生数1万人程度の中規模国立大学でこれに支払うコストは年間約5000万円。この価格が毎年4?5%上昇するという商業モデルが採用されており、独占禁止法にもその性質上抵触しないとされています。上昇の理由は論文数の世界規模での増加。しかし電子化ジャーナルの価格は紙媒体を元に計算されています!

[二つのオープンアクセス] 学術研究の成果はそもそもそれを支えたTax payerに公開される必要がある。これが一つのオープンアクセス。これを実施するためにわが国の大学や研究機関では機関リポジトリの構築をこの数年、急いできたところ。もう一つは電子ジャーナルに掲載された論文を購読することなく自由に読むことができるような仕組みとしてのオープンアクセス。これをしっかり進めるのがオープンアクセスジャーナル。論文は、「購読して読む」から「お金を払って読んでもらう」に大きく様変わりします。そしてもう一つ、過渡的で奇妙な、つまり購読するのにお金を払い、<広く>読んでもらうのにもお金を払う論文ごとの著者負担による、オープンアクセスではない電子ジャーナルに掲載された論文単位のオープン化。根底にあり、解決されねばならない問題のひとつは一論文を電子化するのに<本当は>いくらかかるか?

そして私たち研究者がしっかり考えねばならないことは「誰がジャーナルを作っているか」。研究し、論文を書き、査読し、そして人生のある時期には編集に時間をさく。これらすべての労働がほとんど対価なくすすめられ、ジャーナルの品質保証のために莫大な価格を支払っている現実はどう考えてもおかしくはありませんか? その中身を<日本>の現実に即してもう少し詳しく話します。

キーワード: 電子ジャーナル, オープンアクセス, 機関リポジトリ, フリーダム (ビッグディール)

Keywords: electric journal, open access e-journal, institutional repository, freedom(big deal)